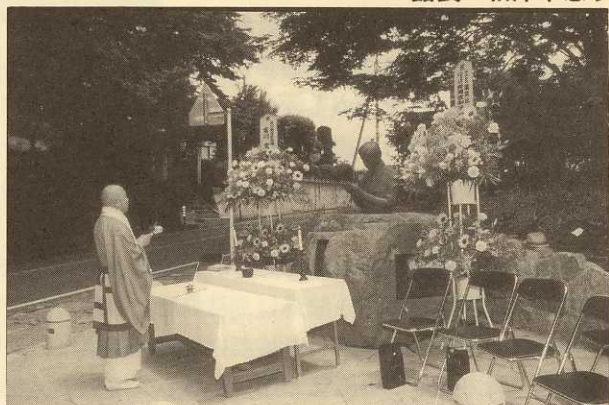




**後援会総会・献花式
モニュメント除幕式**

館長 相澤千恵子



顕彰碑前の献花式(上) モニュメント(右)

5月22日の命日を前にした19日(日)午前10時30分より岩宿遺跡の相澤忠洋顕彰碑前では初めて、献花式を行いました。笠懸町より木村助役、町議会議員有志、岩宿文化資料館松沢亜生館長、当館後援会会長始め会員多数が出席し、又講談社社長野間佐和子様、吉川英治記念館吉川 文様より生花が供えられ盛大に行うことができました。そののち相澤忠洋記念館に移動し、記念館入口に建立した槍先形尖頭器の実測20倍の御影石彫刻石像、高さ1.4米のモニュメントの除幕式を行い、寄贈者、田村岳峰氏と制作者二科会会員、田村智義氏に感謝状を贈呈致しました。その後総会を開催し、平成13年度の事業、決算、監査報告並びに14年度の事業案、予算案審議の後、役員改選となり川原井会長が勇退し、山崎弘一新会長が選出され、会則が改定されました。川原井氏が名誉会長に推され総会を閉会し、恒例の懇親会が和やかに開かれました。

展示室のリニューアルに伴うご協賛

ありがとうございました。

相澤忠洋記念館後援会会長 山崎弘一
皆様方のご理解とご協力に衷心より厚く御礼申し上げます。ご協賛金は、展示室のスポット照明・換気扇・ギャラリー・倉庫の設置に使わせていただきました。展示室は明るく大変見やすくなり、ギャラリーも企画展示ができ好評を頂いております。ギャラリーは会員の皆様方の作品展等にもご利用をいただけます。ど

後援会総会・献花式・モニュメント除幕式

相澤千恵子

展示室のリニューアルに伴うご協賛

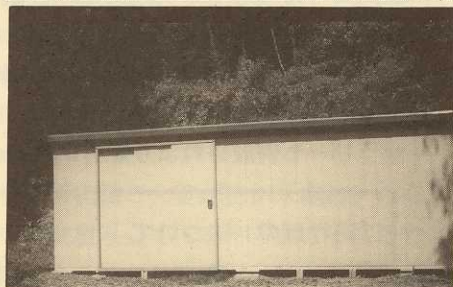
ありがとうございました 山崎 弘一
槍先形尖頭器の文化財指定をめざして 山崎 弘一
後援会会長の任を若き世代にバトンタッチの辞

川原井源次

「あけぼの」について 相澤千恵子
考古学の友に寄す 相澤 忠洋
旧石器研究のあけぼの 菅井 進
菅井進「旧石器研究のあけぼの」を読んで
-なぜ書きたびに違うのであろうか 田村 徹
第3回石器作り体験教室 山崎 弘一
会員ネットワーク



(上)スポットが設置された展示室
(中)新設のギャラリー
(下)資料が収納された倉庫



うぞご利用ください。お申し込みをお待ちしております。

なお、大変恐縮ではございますが、協賛金が目標額に達しておりません。12月末日まで受け付けますので、何卒よろしく願い申し上げます。

ご協賛ありがとうございました(敬称略)

[宮城県] 守屋好子 [群馬県] 秋山忠宥・新井充・新井リコ・磯村勇三郎・市川浩也・今泉善博・小野久米夫・上野茂男・大里仁一・太田誠・大沼美千代・落合高男・金谷幸子・金子友吉・川上昇・川原井源次・北野キミ子・桐生瓦斯(株)・久保田金明・久保田茂子・久保田守・小池久雄・小坂橋郁雄・酒井邦夫・桜井康典・島光子・鈴木紀二六・宗教真光桐生中道場・鈴木羚子・高橋順子・高橋光枝・常見詔子・中澤梢・長島加代子・中村善・野間信子・橋本まさみ (7頁に続く)

槍先形尖頭器の文化財指定をめざして

相澤忠洋記念館後援会 新会長 山崎 弘一

本年5月の総会にて、川原井源次氏より相澤忠洋記念館後援会・3代目会長を引継がせて頂きました。前会長発案の相澤忠洋顕彰碑建立の成果と、会員の皆様のご協力に敬意を表します。これより、会長といたしまして相澤忠洋の業績を正しく後生に顕彰すべく、非力ながら精一杯努力してまいります。



これまで、相澤忠洋亡き後に、幾多の波風を乗り越えて、会員の皆様はじめ多くの方々のお力添えとご理解に支えられ、今日の記念館があるものと深く感謝申し上げます。」

日本にとりまして世紀の発見である旧石器時代証明のパイオニア、相澤忠洋発見の槍先形尖頭器が、文化財の指定を受けていないということは、真に不可思議、理不尽に思うのは私一人ではないと思います。まして、後から発見された石器が重要文化財指定を受けているのは、あまりにも相澤忠洋氏が不憫でなりません。

槍先形尖頭器は日本の遺産です。是非とも文化財指定が受けられますよう、我々一同力を合わせ働きかけていきたいと思ひます。

今、考古学における旧石器研究は、藤村氏事件以降向かい風であります。皆様と共に、より強力に館の運営事業を進めたいと思ひます。会員の皆様に喜んで参加していただけますよう、魅力ある楽しい催し、事業展開を考えております。更に、皆様のお力添えをいただき、より一層の会員の増強につとめたいと思ひます。皆様にも会員増強を、なにとぞお願いいたします。

相澤忠洋記念館は本年6月リニューアルし、ミニギャラリーも併設されより魅力的になりました。

「あけぼの」について

館長 相澤千恵子

相澤忠洋は「あけぼの」と言う言葉が好きでした。夜の明けはじめる頃、暁が明るんで来た時、淡紅に黄身を帯びた色、と広辞苑に記されています。相澤はこの「あけぼの」に勇気付けられてきたのです。吉川英治先生あの有名な「朝の来ない夜はない」と言う名言を座右の銘にしていました。人に語れぬ経済的な苦しさ、旧石器研究に伴う学歴社会の重圧、等々さまざまな問題に耐え、切り進んで来のは正に「朝の来ない夜はない」との信念でした。暗闇の夜の帳も必ず明るい朝は訪れる、「あけぼの」から刻々と暁の空を茜色に染めて、大きな太陽は昇って来る、と希望を持ち続け生きる力として来られたのです。縄文時代が日本最古の歴史と信じられていた時代から、赤城山麓の黎明を知りたい、太古の人々

是非ご来館ください。お待ちしております。

大変な社会状況の中、皆様方の深いご理解を頂き心より感謝申し上げます。

後援会会長の任を若き世代にバトンタッチの辞

名誉会長 川原井 源次

相澤忠洋記念館後援会会長を、私が引き受けたのは平成11年4月であった。そして、相澤忠洋を具体的に顕彰したいと考えた。就任した翌月5月に祥月命日を迎えたのを期に、墓前で献花式を行なった。これを年中行事として定着することを提唱し実行した。又、最初の総会に於いて、相澤忠洋顕彰碑建立案を発表し賛同して頂き募金活動を開始して会員を初め多数の人々のご協賛を得てブロンズ胸像を昨年9月16日に岩宿遺跡に建立出来た事は、会長として大変な喜びであった。この様な事業を残せたのは、会員各位のご協力の賜と感謝している。まだ会長として活躍はしたいと思うが、馬齢を重ね80歳を過ぎては体力も思考も減退し、己れを知ればこの辺で若い力に今後を託し、引退したいと考えていた。幸い、体力・気力充分な山崎弘一氏に白羽の矢を立て、交渉を続けた結果、ようやく承諾して頂けた。私の眼鏡に叶った人物である。種々の問題に適確に対応できる実力者だ。今般の記念館のリニューアルも彼の提案によるもので、その実力は既に発揮されている。これからの後援会のあり方については、私の年齢の半分と思う若い会長に任せて辞退出来る事を心から喜んでいる。今後は名誉会長として、後援会を見守って行きたいと思う。会員各位のこれ迄のご協力に対し衷心から御礼申し上げたい。



の一家団欒の跡を求めたい、と踏査を続けていました。その一念が天に通じ「岩宿の発見」となり、研究のテーマも旧石器時代研究となり、「日本人のあけぼの」「日本原人の探求」と大きな主題と取り組む在野の考古学研究者となりました。そして、1972(昭和47)年7月「相澤忠洋岩宿人類文化研究後援会」が故七条小次郎群馬大学名誉教授を会長として発足し、翌年3月に会報が創刊されました。会報の表題は、七条小次郎会長の揮毫による「曙」でした。そして此度相澤忠洋記念館後援会の編集によって発行される会報「夏井戸だより」の館長コラムに30年前の相澤支援の後援会会報の表題であった「曙」に思いを込めて、「あけぼの」と致しました。何卒よろしくご支援下さいます様お願い申し上げます。

(この欄は「館長コラム」として毎回掲載予定)

考古学の友に寄す

東毛考古学研究所 相澤忠洋

深秋の赤城の山々に何時しか雪が見える田畠のあぜに霜柱が口ずれ来たらんとし思出も深き昭和廿四年も余す所、幾日もなくして過ぎさろうとしている。今日この頃の郷土は何とはなしに物淋しいなごりつきない思がする。□代か前の我々の祖先の人々もいな石の斧、石の鎌を持って郷土の土を切り開いて行き開発に尋(努)力してきた遠い遠い祖先の人々も幾度か此の様な思をよせては自然に名残をおしんで来た事か(で)あろう。



此の時意義在る郷土の史的考究を志する若き学生諸君により、先に荒砥考古学研究会が創立せられ、又今度は其の会誌たる“考古学の友”が発刊せらるゝを聞いてこれひとえに諸君の努力のたまものの成果と思う。

この上は本誌“考古学の友”がよき郷土の考古学考究の友となり得るよう諸君のより一層の努力を希望し願うものである。最近郷土考古学への情熱が学徒諸君の間に相当高まりつゝ有ることは、郷土史事に先史考古学研究普及に於て喜ぶべき事ではあるが其の中にはやゝもすれば、学問としての道を過り貴重なる文化遺産を破壊の浮き目に進んでみちびくもの多いことは遺憾に耐えないものである。

考古学的調査並びに研究には努力と忍耐を元として物事に口密であり、あらゆる学問の助けなくしては出来えない学問である。遺物の土器に富(?)を集めそのものを評価するのをも又、其のものをどうのと論議してきたとするならば、大変な過りなのである。

もしも此の様な考えのもとに口学考究をつゝけるなれば、すみやかにやめるべきである。

再記す。

“考古学とは遺物を集めそのものを論議するものではないのである。諸君は良く此のことを常に頭に入れて何事も日常の勉強を第一とし、しかる上で考古学の研究をつづけられたならば考古学の初期の目的を完成しより以上立ばな研究者となり得ると私は信ずるもの

である。”

又此の事こそ諸君に課せられた責務なのである。末に会誌“考古学の友”発刊を祝し荒砥村考古学研究会の発展を祈るものである。

昭和廿四年十二月二日 東都に旅立つ前夜 稿了
“考古学の友”原稿について

前略

取り急ぎ用件迄

過日の考古学の友の原稿私ついに多忙□□□□書きそこなってしまうました。深くおわび致します。第二号には何かおもしろいものを記させよう。取りあえず創刊号のお祝いの言葉を申し上げるに止めておきます。岩宿の件は今後又大きな問題が残っています。私取りあえず群馬公論紙上に少し私考を書きました。十日頃発行の予定です。その節は御一読下され度し。

木暮君にもよろしくお伝え下さい。今まだ先日おじやましたお礼も申し上げていません。私明(三日)東京に行き五六日頃帰る予定です。

その節は又、では皆々様の御健勝を祈ります。雑誌が出来たれば二冊お送りください。お願い致します。

相沢生

「考古学の友」No2 荒砥考古学研究会

1949年12月4日所収

[□は不明、()は誤字訂正]

(解説:「考古学の友」No2はB5版縦組2段孔版印刷14頁で、相澤の文および手紙は3~4頁に掲載されている。

荒砥考古学研究会は群馬県勢多郡荒砥村(現前橋市)在住の高校生及び荒砥中学校在校生を中心とした学生考古学研究会で1949年8月発足し、研究会機関紙「考古学の友」はNo1~No3迄発刊された。相澤忠洋は発足当初から研究会顧問となり、指導、育成にあたり、会員の一部は名前こそ出てこないが、岩宿遺跡の発掘に参加している。相澤の指導のもと研究者として塚田光、大沢亥之七が巣立ち、また2000年9月には三ッ屋遺跡(大胡町)発掘50周年の集いを開いている。

GALERIE
Be

てまりや

本 店 ・ phone 0284-21-5641
 桐 生 店 ・ phone 0277-22-6527
 イトヨーカドー足利店 ・ 1 F phone 0284-71-8648
 イトヨーカドー栃木店 ・ 2 F phone 0282-24-6694
 □ビナン春日部店 ・ 3 F phone 048-752-0319
 イズミヤ小山店 ・ 1 F phone 0285-21-2611

コムファースト ・ 1 F phone 0284-71-1293
 太 田 ラ フ 店 ・ 2 F phone 0276-38-5021
 イトヨーカドー足利店 ・ 2 F phone 0284-73-3156
 イトヨーカドー前橋店 ・ 1 F phone 0272-43-4707
 イトヨーカドー前橋店 ・ 2 F phone 048-464-8570
 イズミヤ小山店 ・ 2 F phone 0285-21-2612
 イトヨーカドー伊勢崎店 ・ 1 F phone 0270-26-3130

モギカバン

本 店 群馬県桐生市本町5-369
 TEL 0277-22-3824
 FAX 0277-22-2700
<http://www.mogi.ne.jp/>

菅井進氏よりの書簡受稿の経緯について

相澤忠洋記念館館長 相澤千恵子

先に「夏井戸だより」第2号に於いて掲載された田村徹氏の一文につき、菅井進氏より当館宛に書簡をいただきましたので、館長として私から筆者の川島正一氏も又書評を執筆した田村徹氏も自分の書いた論文につき相違している箇所をご指摘頂き「夏井戸だより」の紙上にて意見交換ができれば幸いですと、菅井進氏にお願いをしたところ、ご返書を頂きましたので、田村徹氏にご意見を頂きここに掲載するのでもあります。

旧石器研究のあけぼの

— 岩宿発見前夜のできごと

山形県 菅井 進

1949年3月、私は、田原眞稔が主宰する「縄紋文化研究会」発行の「日本石器時代論叢『縄紋第三輯』」に「粗石器に関して」と題する短い(2ページの)論文を書いた。その中で、大隅発見の粗石器4点を図示説明した。これは事実上、日本で初めて旧石器の存在を学会に問うものであった。群馬県岩宿で、相澤忠洋が明治大学を動員して発掘を行い、ローム層から初めて石器を発見した6ヵ月前のことである。そもそも、私はこの論文を書いたのが旧石器研究を志すきっかけとなり、以来、半世紀の間、考古学、特に旧石器の魅力の虜となった。そして諸先生に教えを乞い、友人達に支えられながら、さまざまな研究を続けてきた。

◇田原眞稔(たはらまさとし)と私

終戦(1945年)以来、日本の考古学研究がいち早く台頭してきたことは研究史が示す通りである。田原眞稔(1925-1980)は、その当時、山形大学(旧師範学校)を卒業したばかりの教員で、その傍ら考古学研究に情熱を燃やしていた。田原さんが私の地元(宮宿町立和合小学校)に赴任されて半年後(1946年)私は、県立寒河江中学校を卒業したが、「何か勉強したい」という漠然とした思いから、家業の木材業を継がず同じ小学校に教員(助教)として勤めることになった。

ある日、田原さんから「考古学を一緒にやらないか」

と誘われた。考古学研究者としての田原さんに畏敬と羨望の念を抱いていた私は、早速同意したことは、言うまでもない。

田原さんの研究構想は、理想に燃え、大を極めるもので、県内で同好の者に呼びかけをする一方、中央の学者、全国研究者との交流をはかるというもので、こうして、「縄紋文化研究会」が結成された。主幹委員・田原眞稔、委員・菅井進、地方委員(北海道・東北諸県から)6名の役員構成で、会員約50名、ほぼ全国に及んだ(1946年)。

研究会の主な目的は、機関誌『縄紋』を年1回編集し発行することであった。

第一輯 A5版、36ページ、1947年4月、150部

第二輯 A5版、30ページ、1948年2月、300部

第三輯 B5版、26ページ、1949年3月、300部

第四輯 B5版、22ページ、1953年2月、200部?

4冊目を最後にして廃刊となった。

発刊当初は全国に研究誌が乏しく、「あんころぼす」ジェラード・グロートの「日本考古学」がわずかに知られ、「考古学雑誌」はまだ再刊されなかった。だから、機関誌『縄紋』は全国の会員に配布され、山形市の書店、八文字屋、郁文堂書店でも売ってもらい(価格30円)、かなり広く読まれたはずである。数年後、神田の小宮山書店をのぞいたら『縄紋第三輯』が数倍の価格で売られていた。

◇大隅の粗石器

『縄紋第三輯』は、私にとって特に記念すべき冊子となった。冒頭に述べた通り「粗石器に関して」と題し、日本で初めて(大隅発見の)旧石器を報告したからである。

この報告が初めてでないはずはない! 私が最初買った濱田青陵「考古学入門」(¥15)には「一ばん古い旧石器という時代は日本にもあったかも知れないが、今日までその遺物が少しも見つかっておりません」と書いてある。不可思議なことに、当時の考古学界では「日本に旧石器がある」を言うことはタブー(禁句)になっていた。我が国に旧石器時代が存在しない理由

有限会社

久保田造園

代表取締役

久保田洋児

群馬県伊勢崎市日乃出町1218番地

電話 (0270) 26-1787番

の一つに「火山活動が盛んだったと思われるローム層（赤土）の中に人間の住める道理はない」というのがあった。そこで「発掘の時、掘り下げて行き赤土が現れたらその作業はおしまい」と書いた学者もある。とにかく、定説に逆らう者には「邪道」のレッテルが張られ、学界から追放あるいは無視されるのが常であった。

私は「若気の至り」でこのタブーにあえて挑戦し、粗石器（すなわち旧石器）の論文を書いた（1948年7月10日、当時19歳）。

●『粗石器』の名は、どうしてそう名付けたのか、人によく聞かれる。《昔の文献にあったような、田原さんが名付けたような、私自身が考えたような、あまりはっきりしない》でも、大隅の粗石器の論文については、自分で考え、自分で実測図を描き、文章もすべて自分が書いたものである（ただし英文は菅井丈夫による）。だから私の1949年の論文にしか出てこない『粗石器』の名の責任はすべて私にある。

その意味は単に『粗末な石器』（広義）でもかまわないが、私の本心では「旧石器」をイメージして「粗石器」と名付けた。大隅の「旧石器」と言えばタブーを破ることになりだれも相手にしてくれないだろうから。それは『旧石器の秘密語』（狭義）として使った。

日本の旧石器時代に対する呼び名は、初めは無土器時代と呼ばれたが、ときには先土器時代の名があり、1965年ころから「旧石器時代」の呼び名に定着したと言えよう。《時代が変われば人も考え方も変わる》…初め「粗石器のなぞ」という言葉が生まれ、次に「波紋となった粗石器」と言われた。この50年間さまざま取り沙汰されてきたが、粗石器に対する世評も（*）肯定論あり否定論あるいは無視ありでさまざまに移り変わってきたようだ。でも私は、まだこの名が気に入っているから不思議なもので、昔懐かしく感じるのである。

（*）大隅遺跡の報告及び参考引用は、主な冊子で、1949-菅井進、1957-芹沢長介、1960-加藤稔、1962-菅井進、1963-菅井進、1965-加藤稔、1965-藤森栄一、196

9-加藤稔、1970-誉田慶恩、1971-森浩一、1975-加藤稔、1975-麻生優、1976-阿部祥人、1977-戸沢充則、1979-菅井進（大隅旧石器の再発見報告）等々があり、大隅遺跡の名が次第に広く知られるようになった。しかし全国の遺跡地図には大隅の名が載っていない。

『大隅』はまます遺跡か！ それほどの存在だった。1980年代になって、1981-東北歴史資料館「旧石器時代の東北」が出版され、やっと旧石器時代遺跡地名表に載り、ほっとした思いがある。（この書に、協力者・相沢忠洋の名がある）

*大隅遺跡は1980年、3月朝日町文化財に指定、標柱と説明文が設置された。

◇発見のいきさつ…屋根裏に眠っていた旧石器

1936年（昭和11年）最上川にかかっている明鏡橋で木橋からコンクリート橋に掛け替え工事が始まるころ、宮宿町（現在の朝日町）和合・大隅で、道路わきの崖の切り崩し作業が行われた。その時、塊のようになって沢山の石片が発見された。それを見た土地主の大竹國治は屋根裏に大切に保管していた。

*隣家の菅井康治の話によると、石片はもっと沢山あって、石油缶2箱ほど最上川へ水中深く、水深およそ10mの所に投げ捨てられた、というのだ。大隅の旧石器が再発見され、朝日町教育委員会と菅井進による発掘が行われたとき（1979年）見学に来た学生が「潜って探してみようか」と言う。しかし、当初の発見から36年たった川底の変化は想像もつかないから、探すのは到底不可能だろう。それに金塊か宝石ならばともかく、引き上げる価値はないだろうし。川底に眠る旧石器の探索は、残念ながら結局あきらめざるを得ないようだ。

さて、大竹氏は、田原さんが考古学の研究者と知り、自ら和合小学校に訪れ「こんな石片があったが、何か（考古学の）役に立つだろうか？」と言ひ、数十個の石片を置いて（寄贈して）いかれた。1947年1月のことであった。…石片を発見して11年たった。

◇旧石器との出会い…感動と興奮のとき

おりしも縄紋文化研究会が発足して間もないころで、

古いのれんに味と真心をこめて！

★地方発送も承ります★

名産 忠 治 漬

(株)高野商店

桐生市 ●本店:錦町1-8-6 ☎44-3322(代) ●支店:錦町2-1-19 ☎43-6598(代)

田原さんは、五百川地方（現在、ほぼ朝日町）の土器編年に余念がなく、「石器は時代に鋭敏でないからおもしろくない」と言い、研究会の役割の中で土器を担当する方を選び、私は石器に興味があったから、おもしろくない方の石器担当ということになっていた。後で考えると変な分け方である。

田原さんと私は、早速、大竹氏の置いていった石器を見ることにした。

見て最初は《なーんだ、不整形（不定形石器）ばかりだ》そして《石片の縁に剥離がない》と思った。…そのころ私は近くの縄文遺跡から、がらくたのような剥片を山ほど拾い集め、不整形石器と名付け研究をしていた。（何も結果が得られずあきらめたが）

しかしよく見ると《違う！ あるものはすらすらと湾曲して大きく、あるものは石べらのようだ。石片はどれも赤土にまみれている。上等な古い鏝節のような風格さえ感じられる》古い石器だ！ と直感した。

田原さんは「すごいぞ！ この石器には古色がある…旧石器かも知れない」と言った。田原さんのこの言葉を聞いて《土器が伴わないから、やはり…》と、私は、急いで0、メンギン「石器時代の世界史、上」1943、及び大山柏「基礎史前学」（発行年？）にかいてある旧石器と見比べ、大隅のこれらの石器は《旧石器に違いない》と確信するに至った。しかし、いざ論文にまとめて発表するとなると容易なことではない。旧石器の知識に乏しくては説明ができない。それに「日本にも旧石器がある」と、その存在を世に問うには、学界の目は厳しく、研究者の資格を失う覚悟をしなければならないのだ。田原さんは近ごろ少しは名の知られた考古学者、危ない橋は渡れない。私は無名の若輩者（田原さんより4歳下）、研究会の石器担当ということで、当然、大隅の石器は私一人が研究し、発表することになった。

◇大隅発見石器の実測図

これまで見たこともない大隅発見の珍しい石器と出会って数日後、何はさておき、その石器の実測図を描こうと思い立った。《今かいて置かないと大事なもの

がなくなってしまうかも知れない》そんな気持ちにもなっていた。

小学校の職員室のあかあかと燃えるダルマストーブのそばの机の上で、たくさんある石器の中から4点だけ選び取り、時折期待と不安で胸をわくわくさせながら、それでも、慎重に丁寧に、一生懸命描き続けた。粗末な方眼紙にかいた原図が今残っていて、日付が《1947/1/31》と、はっきり読める…。

こうして大隅石器の実測図ができあがり、「粗石器に関して」と題して論文を書くことにした。粗石器の由来については前述の通りである。論文は1948年7月10日に書き終わった。

粗石器論文を顧みて

論文の内容については、50年もまえのことだから、今読むと、私自身面喰らうほど要をえない文章だ。しかし、書いた当時は、まじめに真剣に考えた上での文章ではなかったか。昔に返ったつもりで読むと、論の筋書きがかなりはっきりと分かってくる。

まず、この論文はIとIIがおよそ半分ずつの数字で構成されていることに気づいていただきたい。論を進める順序として、0、メンギンの学説から展開し、図示説明は、まず釜山遺跡（縄文早期）発見の石器1点が、その細石器的手法において、ヨーロッパの中石器時代アジリアンのものに似ていると述べた。当時は土器編年学全盛のころで、伴出する石器は土器に付随して年代が決められることが多く、必ず土器との関連において言及するのが常であった。だから、釜山の石器は細石器的手法の紹介に止まり、中石器時代の存在を示唆する確かな証拠はない。前半Iは後半の文章IIの前段の論文で、後で考えると、ほとんど意味がなく、後半を擁護するどころか、かえって足を引っ張る形の論文になった。

後半II大隅の粗石器から旧石器論が始まり、おしまいで続く。すなわち、大隅の石器（4点）はローム層（赤土）の中から出土したと推定され、前期旧石器時代ムステリアン以後の石器（ナイフ・搔器・削器）に似ている。土器は伴わなかった。と書いた。（July2002）

ステンレス製 雨水タンク

雨どいから雨水を貯水します



てん すい どう

天水當

- 庭木の散水に
- 洗車、雑水用に
- 水道代節約
- 水不足対策に
- 災害対策浄水器で飲料水にもなります(別売¥14000)

雨水リサイクルタンク・バイオ式生ゴミ処理機

有限会社 親和工業所

豊明市阿野町惣作27

☎(0562)92-3609 FAX92-3622

助成金が
です(豊田市)
詳しくはお問合せ下さい

〈ステンレス製150ℓ〉

¥ 60,000

〈ステンレス製230ℓ〉

¥ 80,000

消費税別
取付費別

菅井 進「旧石器研究のあけぼの」を読んで

— なぜ書きたびに違うのであろうか —

田村 徹

菅井進氏の一文を読んだ。予想通り川島正一や私の質疑に正面向いて答えていない。氏の文は書く度に細部が少しずつ違ってゆく。重箱の隅を楊枝でほじくる様だが、事実を基に論考する学問にはなじまない。

例えば発見の経緯について当初(1949 注1)は「昭和21年これらの石器の全部が土地の児童によって蒐集されたもの」とあるが1963年(注2)では、昭和11年橋の掛替え工事の際出土し「出土品全部が、そっくり今まで保存されていた」と計58点の資料を報告した。さらに1979年(注3)では、石器は「石油缶(18ℓ×2)に一杯あった。けれどその大部分川に捨てられ」たと報告。石器実測図の日付も1日の違いだが異なっている。細部の違いや矛盾はまだあるがこの辺でやめる。尚評価の詳細については川島論文を一読されたい。

今回の氏の記述によって、川島や筆者(注4)の指摘した縄紋文化研究会の内容がほぼ正しかった事が裏付けられた。「縄紋」を読めば容易に判断できる事である。氏は戸沢等が「縄紋」がローカルな雑誌で中央に届かず、菅井報告が目立たず不運であった、とする見解を「誤り」と指摘した事があるのであろうか。

菅井「粗石器に関して」を何度読んでも、氏はローム層は「沖積層」であり「粗石器」研究が「編年学上—事実上は土器編年—に対して……よい方法」として捉えており、縄文式土器研究の一環としての報告、認識と読取るのが自然である。従って「日本で初めて旧石器の存在を学界に問うもの」という氏の主張は根拠がない。この点を明確にしておこう。

尚、「定説に逆らう者には……学界から追放あるいは無視されるのが常」とあるが、誰が何の説を立てその様な状況になったのか、具体例を御教示願いたい。

注1 菅井 進 1949「粗石器に関して」

『縄紋』第三輯

注2 菅井 進 1963「山形県大隅の石器文化」

『考古学雑誌』第48巻第4号

注3 菅井 進 1979「山形県大隅旧石器の再発見」

『考古学ジャーナル』№167

注4 川島正一 2002「菅井進一九四九年『粗石器

に関して』の評価について(補遺)」

『利根川』23

田村 徹 2002「川島正一〔菅井進一九四九

『粗石器に関して』の評価について」

を読む」『夏井戸だより』№2

※訂正 「夏井戸だより」№2 2頁の拙文中「大隅」を全て「大隈」と校正誤りをしました。「大隅」に訂正願います。

ご協賛者は次の方々です(敬称略・1頁のつづき)

[群馬県] 林則男・彦部敏郎・古沢清・丸山彰・三浦寛子・森村隆作・矢野亨・山崎弘一・山口直永・米田一男 [栃木県] 大美賀恒夫・金井敏夫・北詰みわ・木村有見・田中志郎・平沢セツ子・町田正行・宮崎フデ [埼玉県] 石川行男・小美野隆・川崎柳次郎・小林恒夫・芝崎孝・並木勝美 [千葉県] 片山誠二郎・小林俊光 [東京都] 石井良祐・岩田マサ子・木暮元夫・近藤乾之助・坂入信成・鮫島和子・中島清子・古川峰康・御園生英雄・山岸美慧 [神奈川県] 薄昭子・古川純一 [愛知県] 横井肇 [長野県] 塩沢隆 [奈良県] 加藤洋子 [大阪府] 安井正士・許智晴・竹内浩・富士松孝佳子 [兵庫県] 河合洋子・宗教法人法輪寺 [岡山県] 小野伸・妹尾治子 [広島県] 小林正典

第3回石器作り体験教室

山崎弘一

8月17日石器作り体験教室が開かれ多くの方のご参加を頂き、大変盛大に行われました。暑い日差しを木立に受ける夏井戸の森の中、講師の岩宿文化資料館長松沢先生にはお忙しい中を毎回おいで頂いております。

石器作りの石は相澤忠洋発見の槍先型尖頭器と同じ黒曜石です。石を鹿の角で叩きますと、剥がれるように割れていく訳ですが、これには少々コツが必要で、石の目も見極めなくてはなりません。形は兎も角、初心者にも上手に槍先型尖頭器らしく出来たようです。これは回を重ねる毎に上達してゆきます。

小学生も一所懸命作り、まずまずの出来映えで、夏休みの宿題と良い体験学習ができたようです。出来た石器は小さな木台を作り、これに穴、又は切り込みを入れ好みで着色塗装し、その穴に石器を立て、玄関や居間等に置けば大変素敵な置物、魔除けになるのではないのでしょうか。

今回は講談社の岩田様ご夫妻が田川水泡の、のらくろの紙飛行機を多数組み立ててお持ち頂き子供たちに頂きました。大変よく飛ぶ飛行機で子供たちは大喜びで遊んでおりました。ありがとうございました。

今後も皆様の多数のご参加をお待ちしております。



森の中、鹿の角で黒曜石を割って石器を作った

会員ネットワーク

記念館にある感想ノート・ハガキより（敬称略）

①2001.12.22

教科書にのっている相沢さんの記念館に来ることができ、とてもうれしく思っています。いろいろと貴重なものを見ることができ、とても勉強になりました。（中村 文香）

②2001.12.22

はじめは、相沢忠洋さんについてあまりよく知らなかったけれども、この記念館を始め、多くの資料館を訪れているうちに、自然と相沢さんに興味を持った。相沢さんについて知らない人が数多くいるという事なので、これを機に、私の周りの人達に、自分の知っている範囲で語り伝えたいと思いました。この貴重な記念館をいつまでも続けていてもらいたいです。（今泉 洋子）

③2002.2.28

貴重なビデオを見せて頂いたうえ、日本史を書き換えた運命の石器の本物をじかに見ることができて感激しました。いい記事を書きたいと思います。（前橋市 小森谷 史可）

④2002.6.18

相沢さんのことがよくわかりました。いろいろな物がおいてあっておもしろかったです。すごく為になりました。おくさんもとても良い方でうれしかったです。相澤さんは、とてもすごい方だと思いました。（倉賀野中学校 2年3組7班）

⑤2002.7.5

私は考古学は全く知りません。しかし、岩宿遺跡と相澤忠洋さんには心ひかれます。今ごろになってようやく芹沢長介先生の『日本旧石器時代』を読み岩宿の記述に駅のホームで思わず涙してしまいました。相澤忠洋さんという強大な、偉大な意志に感服します。そして、神はそれに報いて下さったのだなぁという気すらします。岩宿の発見も、そして芹沢先生との出会いもすばらしいことです。

ひとりよがりなことを書き連ねて、申し訳ありま

せん。岩宿遺跡、そして記念館へ行けたことは、私にとって大きな財産となりました。また機会がありましたらぜひうかがいたいと思っております。

貴館のますますのご発展をお祈りいたします。

敬具 （松戸市 中山 珠美）

⑥2002.6.29

石器にあこがれ、それを一生の宝物として求めてやまない相澤さんの思いが伝わって来ました。奥様の情熱的なお話が大変心に残り、生涯忘れない思い出になりました、ありがとうございました。

（三鷹市 遠藤 まき子）

⑦2002.8.15

僕は相澤さんのことはわかっているつもりだったが、相澤さんは人なみの努力でなくすごいどりよくだったとおもう。またいつかここにきたい。

（鹿児島県加世田市 川野竜二）

⑧2002.8.17

このノートに感想を書いてはや1年…時間を作ってやって来ました。今回石器を作るということなのでドキドキしながらここにきましたが、こんなにむずかしいとは思いませんでした。でも楽しかった。そしてまた来たいなぁ…と思いました！ また来ます！（練馬区立北町小学校6年3組 斉藤由貴奈）

⑨2002.8.17

石器作りはとても楽しかった。やっている時、手をきってしまった。とてもいいけいけんになった。石器はよくできた。（高崎 斉藤宣教）

⑩2002.8.25

ぼくは今日やりさきがたせっきを見て、むかしの人のぎじゅつはすごいとおもった。

（ボーイスカウト 山岸孝行）

⑪2002.8.25 相沢のことがますますよくわかった

（町立笠懸南中1年 大須賀優貴）

⑫2002.8.25

自転車で東京までいっていたことやなっとうを売りながらせっきをさがしていたことがすごいと思った。（町立笠懸南中 吉沢直人）

雑木林 遅れましたが夏井戸だよりNo.3をお届けします。本号は相澤忠洋の極初期の幻の著作を木暮元夫さんのご協力で収録できました。赤城嵐の中を温かい眼差しで青少年を指導する若き相澤の姿が浮かんできます。引き続き初期の著作を掲載する予定です。研究史に関連し、菅井、田村両氏からの寄稿は前号雑木林で記したように、出された質疑に誠実に対応するか、改めて問う内容です。後援会新会長に山崎さんが就任。川原井さんは名誉会長に。

ごあんない

開館時間 10:00

駐車場 大型バス可

休館日 月曜日、12月29日~1月3日

交通 東武伊勢崎線・上毛電鉄

入館料 大人500円 子ども250円

赤城駅下車 4km

団体割引 大人400円 子ども200円

相澤忠洋記念館会報 №3 2002(平成14)年10月1日発行◎

発行 相澤忠洋記念館

編集 相澤忠洋記念館後援会

◎376-0131 ☎0277-74-3342 ☎74-3350

群馬県勢多郡新里村奥沢537